

「これは E だ」の「これ」の役割に関する考察

山田浩司 (Koji Yamada)

日本大学

永井均は、『私・今・そして神』において、私的言語の可能性やその役割を考察する際に、「これは間違いなくにくい気分だ」という思いを想定して議論を進めた。この「にくい」は、私的言語が可能かどうかを検討するためにウイトゲンシュタインが『哲学探究』で用いた「E」にあたるものである。「にくい」は私秘的なある気分を指し、「E」は私秘的なある感覚を指す。また、「これは間違いなくにくい気分だ」の「これ」は、『哲学探究』における「これ」（例えば、298 節において、イタリック体で書かれている指示代名詞“*das*”）にあたる。

本発表では、「これは間違いなくにくい気分だ」という思いと同様に「これは間違いなく E だ」という思いも持てるものとする。その上で、「これはにくい気分だ」や「これは E だ」の「これ」の役割について考察する。

マクダウエルも、‘One Strand in the Private Language’において、前概念的なこれ (*this*) に注目している。そして、これに関する考察が、その論文で重要な役割をはたしている。その考察は、『哲学探究』の 293 節と 304 節の解釈やそこで扱われている問題に関する検討のもとで行われている。永井や私のこれとマクダウエルのこれは存在論的な身分が異なるが、マクダウエルと同様に私も、『哲学探究』の 293 節と 304 節で何が言われているかを検討することを通して、これについて考察していく。

本発表は、『哲学探究』の 293 節と 304 節の正しい解釈を目指しているわけではない。ウイトゲンシュタイン、永井均、マクダウエルの議論を参考に、公的な言語の一部である感覚語の意味が成り立つために、私しか把握できないこれがなければならないかどうかを吟味することが、この発表の目的である。

参考文献

McDowell, J. (1989) ‘One Strand in the Private Language Argument’, *Grazer Philosophische Studien*, 33, pp. 285-303.

Wittgenstein, L. (1953) *Philosophische Untersuchungen*, Blackwell. (藤本隆志訳、
『ウイトゲンシュタイン全集 8 哲学探究』、大修館書店、1976 年)

永井均 (2004) 『私・今・そして神』、講談社現代新書。